

# 授業改善をめざした生徒参加型研究協議の試み

吉本 恭子 (高知市立西部中学校)  
鹿嶋 真弓 (高知大学)

## An approach to improve classes through student's participation in meetings

Kyouko Yoshimoto (Seibu Junior High School)  
Mayumi Kashima (Kochi University)

抄録：現在多くの学校で行われている研究授業後の研究協議は、授業者の指導方法についてのふり返りと参加者が付箋などに授業を参観しての気づきなどを記入した、ワークショップ型の研究協議である。ワークショップ型研究協議では、参加者一人ひとりの発言の機会が増え、参加者が話し合いの成果を各自の授業を見直すきっかけにすることができる。また、お互いの意見を聞き合い、話し合うことで、教職員全体の協働性が向上し、組織としての学校の教育力を高めるという効果を実感することができた。しかし、この方法だと教師側の視点だけで研究協議が行われ、実際に授業を受けた生徒の生の声を聞くことはできない。そこで本研究では、授業後の研究協議に実際に授業を受けた生徒が参加する、生徒参加型研究協議を試みた。生徒が研究協議に参加することで、教師側の視点だけではなく、授業を受けた生徒の視点からの話を聞くことができ、授業者の指導方法について、教師だけで行う場合には思いもよらなかった話や、授業を受ける側だからこその意見を射た意見が聞けることがわかった。また、教師側の質問内容を吟味することで、授業改善につながるものや、生徒が学習しやすい環境を整えるためのヒントになることもわかった。質問の中にスケーリングクエッションを入れることで、生徒自身も自分の授業の理解度や目標に対する達成度をふり返ることができ、自我関与が深まることも明らかになった。

キーワード：自我関与、研究授業、研究協議、授業改善

### I 問題と目的

初任者の教員でもベテランの教員でも、「わかる授業」を行うということは、教師という仕事の原点であり、究極の課題でもある。授業改善においては、「どう伝えるか」ということと同時に、それが生徒に「どう伝わったか」を知ることが大変重要である。教員の想いが伝わり、生徒が集中して授業に取り組む時、授業をする教員とそれを受ける生徒に一体感が生まれ、教室に前向きな空気感が生まれる。教師側の一方的な教授方式ではなく、生徒自らも授業づくりに関わっているという自我関与が生まれてくるのである。授業改善におけるPDCAサイクルを考えた時、Pは事前検討会で、生徒の実態に基づいた指導案検討や模擬授業などであり、Dは実際に行われる授業である。そしてCにあたるのが授業後に行われる研究協議である。

研究協議（授業検討会）とは、授業の結果をもとに教員が協議し、授業の成果や課題を明確にする過程を通して、指導内容や方法の具体的な工夫改善を図るなど、参加者全員の授業改善をめざすものである。研究協議において検討された内容に基づき、次のAが導き出される。それゆえ、Cを行う際に求められるのは、授業者や一部の教員だけの意見で進められる評価ではなく、客観的な評価である。現在多くの学校では、研究協議の参加者全員の意見をできるだけ多く聞くために、ワー

クシヨツプ型の研究協議を行っている。ワークシヨツプ型研究協議では、参加者一人ひとりの発言の機会が増え、参加者が話し合いの成果を各自の授業を見直すきっかけにすることができる。また、お互いの意見を聞き合い、話し合うことで、教職員全体の協働性が向上し、組織としての学校の教育力を高めるという効果を実感することができた。しかし、この方法だと教師側の視点だけで研究協議が行われ、実際に授業を受けた生徒の生の声を聞くことはできない。教師側の想像や助言者の理論的ではあるが一方的な発言だけでは限界がある。生徒にとってより「わかる授業」となるための授業改善を行うために必要なことは、直接授業を受けた生徒からの、客観的かつ的を射た意見を聞くことに他ならない。また授業者も自分の授業を受けた生徒からの意見であれば、謙虚に耳を傾けることができるであろう。

そこで本研究では、授業後の研究協議に実際に授業を受けた生徒が参加する、生徒参加型研究協議を試みることで、授業で教師が発した指示や発問を生徒たちがどのように受け止めたかを知り、授業改善に活用することを目的とした。

## II 方法

### 1. 研究協力校および研究協力者

高知市内の市立A中学校の教師（36名：男性18名、女性18名）

### 2. 実践研究

全校授業研究会の研究協議に、実際に授業を受けた生徒が参加して、授業者以外の教員からの質問に生徒が答える形で進行する。

#### (1) 生徒参加型研究協議を始めるまでの準備

##### ①質問事項の選定

共通質問項目・・・班で関わることによって、自分の考えを深めることができましたか？  
教科での質問項目・・・教科部会を開いて指導案の事前検討の際に決める  
自由質問・・・研究協議の中で、個人で質問したい内容を質問する

##### ②参加生徒の決定

授業を行う学級で、生徒参加型研究協議について説明し参加したい生徒を募る  
人数は4～5名

##### ③司会者の決定

司会者は、研究推進委員会において決定する

#### (2) 生徒参加型研究協議の進め方

##### ◎研究協議の視点

- |              |                        |
|--------------|------------------------|
| ①生徒の紹介（自己紹介） | 5分間                    |
| ②生徒への質問      | 20分間（授業者以外の教員）         |
|              | 生徒への質問については事前に研推で決めておく |
| ③授業者の振り返り    | 5分間                    |
| ④研究協議        | 30分間                   |

#### (3) 生徒参加型研究協議の実際

##### ①第1回 X年11月 教科：英語 学年：3年生

単元名 My project 8 伝統文化を説明しよう

（開隆堂 SUNSHINE ENGLISH COURSE3）

目 標 世界で開催されている祭りについて紹介する文を6文以上書くことができる

参加生徒：女子5名（A・B・C・D・E）

質問内容と生徒の答え（一部抜粋）

- 「(今日の授業で) 他の班のワークシートを回して見る活動で参考になった表現はありましたか？」

A：無かった B：6文目 C：無かった D：無かった E：無かった

- 「英文を書く時に、難しかったところはどこですか？」

A：単語がわからなかった B：4文目と5文目 D：3文目の“時期”の表現

E：4文目と5文目

- 「M先生が英語の授業で大切にしていることは何だと思いますか？」

A：単語 B：文節、語順 C：英語での挨拶、文型 D：みんなにわかりやすく話すこと

E：暗記とかをグループ4人でする

- 「グループでの活動についてどう感じていますか？いいところ◎とよくないところ●について教えてください。」

A：◎しゃべったことがない人とでも仲良くなるチャンスがある

B：◎周りの人がどう思っているかなど、いろんなことがわかる

C：◎自分が知らなかったことがわかる。●人の答えを写すことがある

D：◎ふだんしゃべらん人としゃべれる。人の考えがわかる。

E：◎人の意見を聴いて取り入れている。●盛り上がりすぎるとやかましくなる

- 今日の学習でわからなくて困ったところはどこですか？また、それをどのように解決しましたか？

A：単語。友だちのものを写した B：難しい単語があったので友だちに教えてもらった

C：単語のつづり。英和の辞書で調べて解決した。 D：単語。黒板の模造紙を見た。友だちに教えてもらったりした。 E：書き方がわからなかった。班で教えてくれた。

- 今日の授業のゴールは何だったと思いますか？

A～E：誰も答えられず

- 意地の悪い質問でしたが、この質問をしたのは、先生たちは今日の授業でみんなに何を身につけてほしいかを考えてゴールを決め、それをみんなに伝えて授業を行ったつもりです。それがみんなにはどう伝わったか（ゴールがわかっていたか）を知りたかったからこんな質問をしました。もっとみんなに伝わるように努力することが必要だとわかりました。

## ②第2回 X年+1年5月 教科：数学 学年：2年生

単元名 「連立方程式」

目 標 加減法による連立二元一次方程式の解き方を考える

参加生徒 女子4名 ((A・B・C・D))

質問内容と生徒の答え（一部抜粋）

- 今日の授業で難しかったところはどこですか？

A：yの式を求めるところ

B：yをxの式にあてはめるところ

C：問2（2）yを消して代入するところ

- 今日の授業で、ここまではわかったと思った瞬間はどこですか？

D：わかっていないところを指摘された時

B：筆算で求めたらしいということを教えてもらった時

- 今日の授業で、時間を短くできるところはどこだと思いますか？

- A : 先生に解き方を教えてもらう
- C : 問2をみんなで考える時間を短くする
- D : 自分ひとりで考えずに、班の人に聞く
- どうすればもっと班の中でかかわり合えると思いますか？
  - A : もっと班の人と話せるようになる
  - B : 訊くのが恥ずかしいと思わずに、もっと積極的に訊く
  - C : 自分から話しかける
  - D : 自分から積極的に訊く

③第3回 X年+1年10月 教科：国語 学年：3年生

単元名 『詩と写真を組み合わせてポスターを作ろう』（挨拶—原爆の写真に寄せて）

目 標 組み合わせる写真や引用する部分について検討する

参加生徒 男子2名女子2名（A・B・C・D）

質問内容と生徒の答え（一部抜粋）

- 班で交流することで、自分の考えが深まったり、広がったりという変化がありましたか？
  - A : 進化した意見が言えた
  - B : 評価してもらってよかった
  - C : もう一度見直すことでアドバイスができた
  - D : 意見を取り入れることで、相手の考え方も知ることができて考えが深まった
- この1時間の授業で何を理解し、自分にどのような力がついたと思いますか？
  - A : 友だちの意見を理解し、アドバイスする力
  - B : 相手の気持ちを考えることで、他の意見も知ることができた
  - C : 友だちの意見の大切さに気づき、自分の意見にプラスできた
  - D : 班で交流することで、コミュニケーションがとれ、いろいろ認められた
- この単元「詩と写真を組み合わせてポスターをつくろう」を学習するなかで、どのような力がついていると思いますか？
  - A : 読解力、詩の意味を深く読み取る力
  - B : 詩の中の言葉を理解する力
  - C : 詩の中の言葉から判断して、資料を関連させる力
  - D : 詩の内容を読み取り、自分の言葉で伝える力
- グループで話すとき、同じ写真を選んだ人との話と違う写真を選んだ人との話で、どちらがより考えか深まりましたか？
  - A : どちらも意見の深まりがあった
  - B : 同じ写真を選んでも、みんなの感じ方がそれぞれ違うのが参考になった
  - C : 共感し合えた

写真1 研究協議に参加している生徒



写真2 研究協議で発言している生徒



④第4回 X年+1年10月 教科：英語 学年：2年生

単元名 PROGRAM6 Work Experience Program

(開隆堂 SUNSHINE ENGLISH COURSE2)

目標 to不定詞(to動詞の原形)を使って、「～するために」という英文を言うことができる  
参加生徒 男子2名女子2名((A・B・C・D))

質問内容と生徒の答え(一部抜粋)

日時 平成28年10月26日(水)6限目

- ペア活動やグループ活動を授業で積極的に取り入れているとは思いますが、それをやっている時にやって良かったなあと思ったのはどんな時でしょうか？

A：英語で話した時に、自分の気持ちなどが相手に伝わった時に嬉しいです。

B：分からない人がいるときに教えることで、自分もまた理解することができるので、そういうところがいいです。

C：相手が何を思っているかがわかって、交流とかがもっと深められるかなと思います。

D：一人で文章とか単語を覚えるよりも楽しく覚えられます。

- この単元になってから、高知の偉人についてのミニトークが最初にありますが、そういうのを英語で聞いて勉強することをどう思っていますか？

C：楽しくていいと思います

A：社会とかでも習うんですが、街で外国人とかに会った時に、話してもらったことが生かせるのかなと思います。

D：歴史で普通に習うのとはまた違って、英語で歴史のことを学べるので、もう一つ歴史を普通に習うのと、二つ習えて良かったです。

B：今まで習ってない新しい単語が出てくるけど、それをどのような場面で使うかもわかっていいです。

司会：Cさんは楽しいと言われましたが、どんなところが楽しいですか？

C：英語の話に対して、みんながどんな関心をもって、いろんな発言をして、それでまた言葉が広まって行って盛り上がっていくところが楽しいです。

- 毎日S先生が授業の中でたくさんの英語を使われると思うのですが、代表で来てくれている4人のみなさんは、あれぐらいの英語だとほぼ100%理解できていますか？もしくは分からなかった時にどうしていますか？

A：自分は、英語はあまりわからない方だけど、わからなかった時は「今のはどういう意味？」と聞いたりしています。

司会：それは、誰に聞いていますか？

A：S先生に聞いています。

D：私も隣の人にまず聞いて、隣の人も分からなかったらS先生に実際に聞いています。

B：だいたい8割ぐらいはわかるので、わからない単語が出てきた時には、教科書の後ろにある辞書などで意味を調べています。

C：ところどころ分かるんですけど、分からない時は、班とか周りの人に聞いて、みんなわからんかなと思ったら先生に聞きます。

- 簡単な質問ですけど、普段の授業と比べて違っているところもあったと思うのですが、みなさんがそれぞれ自分の英語力を100としたら、今日の授業の最後「to不定詞」を使って「～をするために」ということを、言うことができたり、書いたりするという今日の目標に対しての、自分の達成度を自己評価すると、何%くらいだと思いますか？



A：今日は80%ぐらいです。比較的1組は結構わーわー言うクラスなんですけど、今日はだいぶ静かにやっていました。

B：僕もAくんと同じで80%ぐらいできたと思います。

C：自分も二人と同じで80%ぐらいできました。

D：私は70%ぐらいです。

司会：達成度100%のうち80%、70%ということなんですけど、100%でなかったところはどこかというところなんですか？

○ 同じ意味で、あと何があれば100になるか教えてください。

B：自分がわからない単語が時々あるので、そこをもうちょっとわかりやすく、よく出てくる単語などをわかりやすくしたら、100になると思います。

C：今日は先生がいっぱい見に来ていたから、S先生に聞きにくかったというのもあるので、いつものように聞きやすい感じやったら100にいったかなと思います。

A：自分もBと同じで、やっぱり今日はちょっと先生方がいっぱいいて、聞きにくかったかなと思います。

D：私は、Bくんと同じでもっと単語力があつたら、今日のような授業も、もっとすらすら文が書けて、できたと思いました。

### Ⅲ 結果と考察

#### 1. 生徒参加型研究協議を行うための体系づくり

研究協力校において生徒参加型研究協議を行うにあたって、事前に確認したのは、司会者の役割と研究協議に参加する生徒の人数、質問はどのように選ぶのかという点である。司会者については、それまでの研究協議で行っていた研究推進委員会（校長・教頭・主幹教諭・教務主任・研究主任・生徒指導主事・学年代表）のメンバーの中から選ぶというやり方を継続した。司会の役割については、参加生徒の紹介（自己紹介）、参加教員からの質問を受け、それに対する回答を生徒に求めるというものである。第1回から第3回までの研究協議においては、司会は「質問を受ける」「回答を求める」の繰り返しであったが、第4回の研究協議においては、司会が「Cさんは楽しいと言われましたが、どんなところが楽しいですか？」とか「それは、誰に聞いていますか？」など生徒の回答に対して、回答を補うような質問や深く切り込んでいくような質問を行なっている。このことにより、さらに具体的に生徒たちがどのように授業を受け止めているのかを知ることができた。生徒参加型研究協議において協議を深めたい時の司会者の役目は大きいと言える。

研究協議に参加する生徒の人数は、研究推進委員会で4～5名ということに決定した。また選出方法については、授業者もしくは授業を行う学級の担任が考えるということになった。結果、すべての研究協議において、「研究協議に参加したいと思う生徒」という立候補者を募り参加生徒を決めるというものになった。そのため、その教科に対して関心があり、比較的理解度が高い生徒たちが多く参加することとなった。男女比についても枠を提示していなかったため、最初の2回は女子のみということになってしまった。生徒の選び方によって、出てくる回答が大きく違って来るので、この点については考慮する必要があると考える。例えば、男女比は同数とし、その教科を得意とする生徒と苦手意識をもっている生徒など、多様な意見を聞くことができるような枠を設定したうえで選ぶようにしたい。

次に生徒への質問についてであるが、研究協力校では、全ての授業に対して共通して行う質問として同校の授業のスタンダードである、班やグループでのかかわりについて問うこととした。これによって、生徒自身が班やグループでのかかわりについて考える機会を得ることができると同時に、

教員も改めて自身の授業をふり返るきっかけとなっている。この共通質問の意義は大きいと言える。中学校は教科担任制であるので、自分の専門教科以外の教科に対しては、教科のねらいなど十分に把握できていない場合がある。そこで教科に関する質問については、教科部会を活用して、事前の指導案検討の際に、質問内容を考えることにした。質問の順番と誰がどの質問をするかまで事前に決めておくことも重要である。これらの質問に加え、本番の研究協議のなかでは、さらに深く聞きたい内容について、フリーの質問の場面を設定している。これによって、教科や学年の違いを超えた別の視点からの質問をすることができた。

## 2. 教師自身の授業改善につなげるための生徒とのシェアリング

研究協力校において生徒参加型研究協議を試みて、教員が最も関心を示したのは、「授業を受けた生徒に直接聞きたいことが聞ける」という点である。授業のねらいは達成できたのか、自分の伝えたいことを生徒はどう受け止めたのかについてのすり合わせ、そしてそれがずれていた場合には、そのずれを解消するためのヒントもまた生徒からもらえて、授業改善につなげることができる。実際に研究協議の中で、思いも寄らないような意見をきけることも度々あった。我々教師は、常に「今日の授業はこれで良かったのだろうか」「子どもたちはわかってくれたのだろうか」との思いをもちながら、授業を行っている。しかし、実際に授業を受けた生徒から直接その感想を聞くことで、その場でPDCAサイクルのCが行われ、次の授業改善へとつなげることができることがわかった。

## 3. 生徒自身の自我関与

この試みは、教師の授業改善のためのものであったが、実際に行ってみると、生徒自身が授業に積極的に参加する様子が見受けられるようになった。これは、研究協議に参加して教員から質問されることによって、自分たちも授業に関わっているという自我関与の意識が芽生えたためと考えられる。質問を受け、自分の授業の受け方を考える中で、より良い授業にするためには、自分たちがどうすればいいかという立ち位置を考え、内省が深まった場面も見られた。また教員に自分のことを聞いてもらい、意見を大切に扱われることで、自己有用感を感じることができた生徒もいる。さらに、研究協議で述べた自分の意見が授業改善に反映されることで、改めて自我関与の意識が高まることが示唆された。